

山と博物館

第43巻 第10号 1998年10月25日

大町山岳博物館

企画展 林敷山人一美 安曇野風物画展 10/18(日)~11/23(月)



残雪の五竜岳

林敷山人一美 画

開催にあたって

大町山岳博物館

林一美さんは信州の豊かな自然を愛し、自分の足で歩き、目で見た様々な風景を描いてきました。

林さんの一年はまさに自然とのふれあいに満ちています。春は山菜採り、秋はきのこ狩りを楽しみ、草花の見られる間は北アルプスの山々や仁科三湖、安曇野を植物図鑑片手にゆっくりと見て歩き、冬はゲレンデで流れるような美しいスキーを披露しています。とりわけ植物の散策にはじっくりと時間をかけ、珍しいものや見分けのつきにくいものなど、花の裏側や茎、葉まで数冊の図鑑と引き比べながら細かく観察しています。

鷹狩山山麓の自宅の庭には、林さんが長年にわたって種や小さな株から丹精込めて増やしてきた山野草が四季折々に咲き競い、さながら植物園のように訪れる人々の目を楽しませています。

山岳博物館で開催された「春の山野草展」や「秋のキノコ展」では、植物図鑑だけではなく持ち前の觀察眼で蓄えてきた知識を元に、展示の指導や山菜、きのこの鑑定などにお力添えをいただいております。

林さんは心に残った風景を絵に描くだけでなく、俳句や短歌にも詠んできました。素晴らしい自然に触れた時の感動をそのままに、林さん独自の言葉で詠まれた数多くのうたは、絵と同じく味わい深い作品に仕上がっています。

この度、かねてより交流を深めてきた当館で、林さんにとって六回目の個展が開催されることとなりました。一〇月一八日から一月二三日までホール・特別展示室・教室で開催し、入場は通常料金です。林さんの思い出がいっぱい詰まつた多くのうたと共に、安曇野の風景をご高覧下さいます。

言葉のスケツチ安曇野

林 蔵 山 人 一 美

安曇野は西に屏風を立てたよう

に後立山連峰の峻険な峰々がそそり立つており、その雪解けの水は谷川を流れ仁科三湖に漲る。

ていた。青木湖は北側の湿地帯にサワオグルマの群落があり黄色い花の盛りにはその花と湖水の色とあつた。



扇沢残雪の梅花を見おらず
後立山 蔵山人

ひつそりと静まりかえった居谷里の湿原には薄暗い木立ちの間に白いミズバショウの花が映え、沼には水の面にヒツジグサの可憐な花が浮いている。

静かな居谷里の沼のひじぐれ
水面に浮くし花 ほほえむね 蔵山人

籠川に沿つて扇沢へ登れば崖上の木立ちの間に華麗なシャクナゲの花が咲き乱れて居り、沢には端整なキヌガサソウの花が映え、ミネザクラの佳麗な花の下を針の木峠を目指して登る大雪渓では左右の山の斜面で美しいシラネアオイの花が迎えてくれる。

平川の暑い陽射しの河原を散策すれば赤紫の佳麗なシナノナデシコの花が待ち受けてくれる。

扇沢残雪の梅花を見おらず
後立山 蔵山人

照り返す春日原の平川原
水面に浮くし花 ほほえむね 蔵山人



中綱湖へ行けば木の橋があり、ここに佇めば水の面にヒシが浮いて居り、アシの間にはコウホネの黄色いつぶらな花が顔をのぞかせてくれる。また旅人が命を託した

早春の塩の道には、乙女子の如きユキツバキの花がほほえみかけてくれる。また旅人が命を託した





石仏が今もしつくりと立っている。

(画家・大町市在住)



私はこのような清らかな水の流れれる川があり、山の木々には美しい花が、そして山野草の可憐な花が咲き乱れるこの安曇野が好きである。



遠見尾根へ登ればやや開けたなだらかな斜面に出る。ここには可憐な花をたわわにつけたツリガネツツジの群落また枝の先に白い花を房状につけたハクサンシャクナゲの群落があり、オオバツツジの花も咲くここは山の美しい「つづじ園」である。そして眼前に峻険な五竜岳が迫る。





写真1. クワゴマダラヒトリの幼虫 1998.6.2 ザゼンソウの葉上

ヒトリは、古くから桑の害虫として知られ、クワノゴマダラチョウと呼ばれた。また、若齢時代には果をつくつて群棲するところから「桑の果虫」などとも呼ばれた。老熟幼虫(写真1)は、体長が四五mmもあり、体には橙黄色や青色のいばがあつて、ここから黒色や白色の長毛が生えているので種類の判定は容易である。

この毛虫は雑食性で、クワ以外のいろいろな植物につく。ザゼンソウやミズバショウのほかにもノリウツギやサ

居谷里湿原のザゼンソウに クワゴマダラヒトリ大発生

宮田 渡

一九九八年六月二日、大町市の居谷里湿原の巡視を行った際に、ザゼンソウの葉上におびただしい数のクワゴマダラヒトリ(ヒトリガ科)の幼虫を確認した。



写真2. クワゴマダラヒトリのまゆとさなぎ

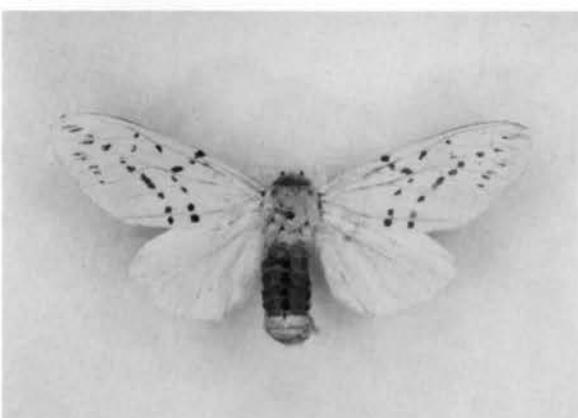


写真3. クワゴマダラヒトリの成虫(雌) 居谷里湿原産(飼育品)

ワタガリにもみられた。繭は毛をつづつてつくられ、このなかでさなぎになる。成虫(蛾)は、雌と雄とでは、まったく異なっている。すなわち、雌ははねの色が黄白色であるのに対し、雄のはねは淡黒色である(写真3、4)。

ザゼンソウもミズバショウとともに毒草であるが、これらの葉を与えて飼育した数個体は正常に羽化した。ただし、すべて雌であつた。



写真4. クワゴマダラヒトリの雄



(日本蛾類学会会員)